

心ふれあう



おかやまのちよっとい話

シリーズ ⑱

※チラシのお届けは10月より**第一日曜日**に変更になります。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

息子へ、孫へ、次世代へ。

今年、戦後70年の年です。70年前の8月15日正午に昭和天皇による終戦の勅書、いわゆる「玉音放送」が流れました。

ある人から、言われました。「戦後80年は無いかもしれない、あなたは家族がどこでどんな気持ちで玉音放送を聞いたか知っていますか？」と。

つまり、今の現代を生きる私たちは戦争を体験した人から直接当時の話を聞ける最後の世代なのです。良くテレビでは広島や長崎の原爆体験者の語り部が高齢化しているニュースが出ます。それは当然おかやまでも同じことなのだと思えら

れました。皆さんは、自分の家族がどんな体験をしたのかご存知ですか？終戦の時、どこで何をしていたのでしょうか。

気になった私は、今聞かなければと想いすぐに83歳の父に、玉音放送をどうやって聞いたか尋ねてみました。父は元氣ですが、耳も遠くなり、物忘れも最近多くなってきています。でも昔のことは良く覚えておりました。

当時13歳の父は実家の赤警市に住んでいました。

前日から、大人たちが明日の昼は大事な放送があるからラジオを聞か



なければならぬと騒いでいたそうです。ラジオも全家庭にあるわけもなく、ラジオのある家に集まって聞く段取りです。

そして、8月15日正午玉音放送が流れました。皆、黙って聞きました。しかし、電波状況が悪く放送は途切れ途切れ、昭和天皇の言葉も難しく父はもちろん大人でも内容は難しく分らなかつたそうです。アナウンサーの言葉を最後まで聞いて初めて、どうやら戦争が終わったらしい。理由はわからないが、負けたのではなからうか、という感じだったようです。

はっきり負けたと知ったのはもっと後になってからだったそうです。子どもながらに何とも形容しがたい、複雑な気持ちになったと話していました。

そんな話をするうち、疎開の話、食べ物などの戦時中の話を多く聞くことが出来ました。戦争は二度と繰り返してはいけないということ、を私たちの世代が引き継いでいかなければならないのだと強く感じる出来事でした。

杜甫 城春にして草木深し 山河在り 国破れて

「春望」冒頭の一節。人は古より歴史を繰り返し、その度に失いまた多くを学んできました。次世代により良い日本を繋ぐため、私たちが先人から学ぶことはまだまだ多いのではないのでしょうか。

葬儀・法要・ギフト

あなたのアーバンホール

アーバンホール